群馬大学理工学部へ留学して

工学研究科 博士前期課程 電気電子工学専攻2年 靳（ジン） 光磊（コウライ）

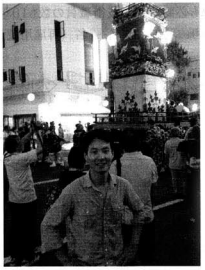
私は中国の河北省石家荘出身です。私は高校3年のとき、「日本留学」という言葉に出会いました。「光陰矢の如し」といいますが、日本に来てもう6年経ちました。小学校時代は世界を認識し、中学・高校時代は友人を作り、そして大学時代は社会人となるための素養を身につける時期だと言われています。つまり、大学時代は人生で最も重要な岐路だと考えられます。有名な大学に入り、一流企業に就職することは、誰でも切望する道だと思います。私は、そんな気持ちから、群馬大学を選びました。

最初群馬大学に来たときは少し失望しました。電車は1時間に1本で交通がとても不便だし、都会から離れていて若者向けの娯楽なども全くありません。知人もあまりおらず、寂しさを感じていました。正直に言うと、夢に見ていた大学生活とは全く違いました。

しかし、少し大学の生活に慣れると、群馬大学の魅力を感じるようになり、学生生活が楽しくなりました。群馬大学は自然に囲まれていて、静かで、空気もきれいです。そして、喧騒から離れて身も心も癒される最高の学習環境です。近隣には歴史を感じさせる観光地も多く、そこで思う存分歴史や文化を味わうことができます。大学でも伝統的な日本文化を実際に体験する機会があり、生け花と茶道などの日本の文化や歴史を勉強することができます。

大学に入って、最も不安なことはやはり研究でした。でも研究室の学生はとても親切で、ゼミで困った時には何でも丁寧に教えてくれました。上手く話せなくても、いつも笑顔で何度も繰り返し話を聞いてくれました。親しさは勉強に関することだけではありません。研究室では必ず月一回飲み会を行い、みんなと自然に仲良くなりました。私はいつも、みんなから、あるマンガ主人公の名前、「じんたん」というニックネームで呼ばれています。

先生方もとても優しかったです。普段は研究について、詳しく、そして分かりやすく教えてくださいました。先生の指導の下で書いた論文は国際学会で発表でき、自分の研究成果を外の世界に示すことができました。これは、自身の知見を広めることになり、とても良い経験でした。また休日には先生からよくお昼ご飯に誘っていただきました。たわいもない話から始まり、将来のことについてまで色々お話できたのは一生の財産だと思います。



筆者

私は、群馬大学のおかげで憧れの企業に就職できました。今後は日本人と同じように、一人の社会人として日本社会に自分の位置を探したいと思います。そして、日本人の価値観、人生観などに至る精神的なものをさらに深く理解し、そうしたものをできる限り多くの中国人に伝えていきたいと思います。

私は今では自分が群馬大学の学生であることを自慢に思うほど、群馬大学が大好きになりました。修士2年生の私にとって、大学生活も残りわずかですが、これからの日々をより大切にし、残された大学生活を豊かに過ごしたいと思っています。

研究室メンバーと一緒に